

鳥居龍蔵記念博物館 NEWS LETTER

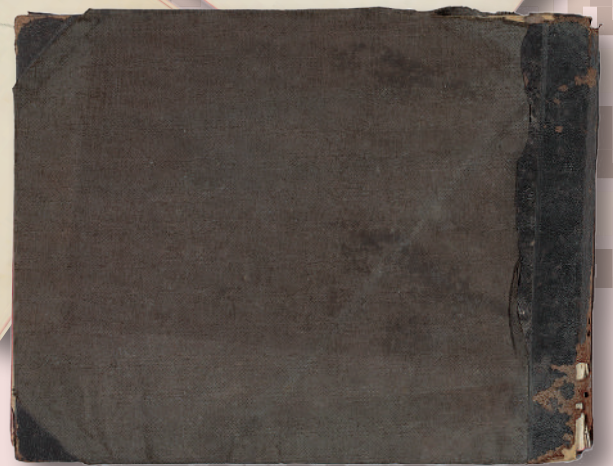
2

2022. Autumn
Tokushima Prefectural
Torii Ryuzo
Memorial Museum

鳥居龍蔵は、1870（明治3）年に現在の徳島市東船場町で生まれた人類学・民族学・考古学の研究者である。日本国内はもとより、台湾、中国西南部、東北部・内モンゴル、朝鮮半島、シベリア、サハリン、千島列島など、東アジア各地の様々な民族を対象に、学際的な方法を駆使して調査・研究を行った。彼の遺した約7万点にも及ぶ膨大な資料群が、徳島県立鳥居龍蔵記念博物館に保管されている。



鳥居龍蔵は今からおよそ125年前、1896年に初めて台湾を訪れました。以後、1911年まで5回にわたって、すべての台湾原住民族の調査を行っています。第1回調査のフィールドノートには、原住民族の描いた図、器物等のスケッチ、アルファベットで表された原住民族の語彙などが見られます。ノートを介して「聞き取り」をする鳥居の姿が彷彿し、臨場感あふれる貴重な資料といえます。（長谷川賢二）



今季の逸品

第1回台湾調査 フィールドノート

 文化の森総合公園

徳島県立鳥居龍蔵記念博物館

資料で たどる、鳥居龍蔵の学問と生涯

第2章 上京、海外調査、そして結婚

「鳥居は十代をどのように生きたのか?」。前号では、上京するまでの青年・鳥居龍蔵の学問的歩みをたどり、その過程で、鳥居の研究生活の基礎に、徹底したフィールドワークの実践があることを確認しました。鳥居は十代で確立したこの研究スタイルを終生継続することによって、独自の「知の世界」を切りひらいていったのです。

1890(明治23)年、鳥居は東京帝国大学人類学教室主任の坪井正五郎の誘いに応じ、修学のため単身上京します。徳島からの「巣立ち」です。ここでは、上京以降、生涯のパートナーとなる妻・きみ子との結婚までの動きを、大まかにまとめてみましょう。



東京人類学教室(赤い矢印が鳥居、その右が坪井)

上京した鳥居は、すぐさま坪井を訪ねましたが、坪井はヨーロッパに留学中で、日本に帰国するのは三年後とのことでした。鳥居はこの間、『^{ちようこぎっしやう}徴古雑抄』の編者として著名な歴史家・^{すぎむら}小杉楹邨をはじめ、徳島出身の知人を訪ね歩き、居候しながら坪井の帰国を待ちました。

三年後にフランスから帰国した坪井は、鳥居に人類学教室の標本整理係の仕事を与えます。その後鳥居は、国内外で様々な調査・研究を重ねながら、東京帝国大学で正規の地位

を得て、助手、講師、助教授と栄進していったことは周知のとおりです。

鳥居の初めての海外調査は、1895年の遼東半島調査でした。前年に勃発した日清戦争の勝利によって清国から割譲された地に、師である坪井の^{きもいり}肝煎で東京人類学会の派遣員として赴いたのです。初めての海外調査であり、言語も通じない状況で、ひたすら歩き続けたといわれます。その過程で、たまたま邂逅した^{かいこう}二基の^{てんまつ}巨石構造物の一つが右の写真です。その顛末について、『ある老学徒の手記』(以下『手記』)に次の記載があります。



析木城のドルメン

この二個のドルメンを発見したとき、最初これがドルメンであるかいなかにつき、私は大い^{ちゆうちよ}に躊躇した。けれどもその時既に私はフェルガッソンの『巨石遺蹟』やラボックの『有史以前』を読んでおつたから、これが所謂ドルメンなるものであると断言し、ドルメンが満州にあることを証明したのである。

鳥居は帰国後、雑誌『太陽』2巻（1896年発行）に遼東半島でのドルメン発見を報告し、東アジアにおけるドルメン確認の初例となりました。

続く1896（明治29）年からは、5回にわたる台湾調査が実施されています。その契機は、遼東半島と同じく、日清戦争の戦勝に伴う台湾の割譲に求めることができます。当時、下関条約の清国全権をつとめた李鴻章りこうしょうをして、「台湾山上せいばんに生蕃あり。その統治は頗る困難であろう」と言わしめた台湾の原住民族の把握が台湾統治の政策課題となっていました。そのため東京帝国大学から調査員を派遣することとなり、坪井正五郎から鳥居に相談があったとされます。

この間の経緯を鳥居は『手記』に「私の他に行く人がないので、（坪井を）気の毒に思い、大胆にも決心した」と記しています。師である坪井を慮おもんばかっての調査志願でしたが、鳥居にとってこの台湾調査は、そのさらに西方もしくは南方に展開する、「インドシナ民族」・「インドネジアン」と日本人とのつながりを確認し、独自の日本人起源論を形成するうえでの重要な調査となりました。



台湾フィールドワーク時の鳥居



鳥居きみ子

1901（明治34）年の年末、鳥居龍蔵は、同じ徳島市出身の市原きみ子と結婚します。きみ子は、徳島市富田浦町で、市原応資・とよ夫妻の三女として生まれ、徳島県尋常師範学校を卒業、撫養尋常小学校の訓導くんとうをつとめた後、東京音楽学校に入学し、在学中に鳥居と知り合いました。市原家は武家出身の堅実な家柄で、鳥居の天衣無縫な人間像を懸念し、親戚一同が縁談に反対していました。これに対し、きみ子本人は「博士になる人物、私が博士にしてみせる」と周囲を説得し、結婚したといわれます。

親戚の懸念のとおり、鳥居家は経済的に困窮することが多く、その一方で、きみ子が睨んだとおり、鳥居は文学博士に上り詰めました。そして、きみ子の生涯も、結婚当初に語ったとおり、夫とともにアジアを巡り、終生を人類学調査に捧げるものとなったのでした。

（石井伸夫）

ゆかりの地 今昔

今回は、鳥居龍蔵の「ゆかりの地」として、徳島市南佐古に所在する、縄文時代晩期～弥生時代前期の遺跡である「^{みたに}三谷遺跡」について紹介します。

1907（明治40）年、徳島市内で水道敷設工事を行う計画が立案され、現在の徳島市南佐古には、「佐古配水場」（写真1の楢円内あたり）を造ることになり、1924年9月28日から濾過池建設工事が始まりました。そのような中、1925年2月19日、徳島人類学会のメンバーである森敬介（1888～1947）は、東京人類学会に対して掘削中の濾過池で、弥生時代の遺構と、縄文時代の杭上生活の遺構を発見したとの報告を行いました。そこで、鳥居龍蔵は、同年6月10



写真1 佐古配水場遠景

日に徳島を訪れ、徳島人類学会の森・井上達三（1867～1928）・前田正一（1892～1955）・小川国太郎（1876～1944）らの協力を得て、調査を行いました。写真2は、その調査時のもの

です（写真の楢円右側が鳥居。楢円左側が森）。この調査時に、鳥居は、縄文土器の存在を確認し、また、掘削中の濾過池の底から出土した1本の木（写真中の鳥居の前に横たわるもの）を調査しています。この木について、森は独木舟^{まるきぶね}と考えましたが、自然流木ではないのかという意見も多く、関係者の間で見解が対立していました。鳥居は、佐古小学校で調査成果についての講演を行った際、「検討すべき事が多いが、縄文土器

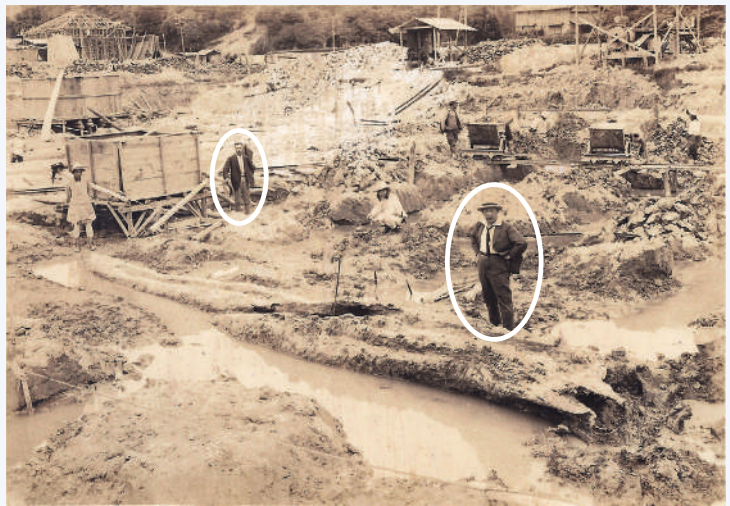


写真2 鳥居の三谷遺跡調査の様子

が付近から出土していることから、もしかすると、縄文時代の「舟」のようなものかもしれない」というように話しました。また、出土した木を保存すべきという鳥居の意向を受けた森らと徳島市の間で話し合いが持たれましたが、意見はまとまらなかったようです。鳥居自身は、三谷遺跡の再調査を行う計画を立てていましたが、結局都合がつかず、調査を断念しました。もしも再度調査を行った場合、鳥居はどのように結論づけたのでしょうか。

（下田順一）

資料整理 の最前線

ここでは、徳島県立鳥居龍蔵記念博物館の館蔵資料整理作業の成果のなかから、未公開の資料を中心に紹介していきます。第2回は、鳥居の近畿調査に焦点をあてます。

鳥居龍蔵記念博物館には、鳥居龍蔵（1870～1953）やその家族はもちろん、周辺の人物に関する資料も収蔵されています。例えば、大阪毎日新聞社5代社長の本山彦一（1853～1932）もその一人で、近年の資料調査により本山の書簡4通（いずれも鳥居龍蔵宛）が確認されました。本山は、1917（大正6）年7～8月に鳥居らとともに近畿調査を行った人物です。さらに、鳥居の調査研究を金銭面において支援したり、1921年には鉄筋コンクリート製の書庫を鳥居の自宅に建てたりするなど、鳥居にとって良き支援者でもありました。ここでは、大正6年9月25日付の本山の書簡（図1）をもとに、近畿調査後のあるエピソードを紹介したいと思います。

そのエピソードの内容は、次のとおりです。先日、「土居翁」（土居通夫、1837～1917）の葬式の際に、法隆寺住居の博識家・北畠治房（1833～1921）に会しました。「小生」（本山）が大和の遺跡の事を話したところ、「先生」（北畠）は毎日新聞を読んでいるようで、開口一番「大和には石器時代の遺跡はない」と述べました。これに対し、「それは間違いです。小生は鳥居講師と同道し、遺跡を探し出し、遺物の取得も少なからず行い、（大和に石器時代の遺跡があることを）実証しました。近日このことは出版されるのでご覧いただきたい」との会話があったようです。

「大和のことなら知らない事はない」と自称する北畠治房でさえ知らない情報をつかんだ本山にとって、上記の事柄は「実に一つの奇談」に感じたようです。注目すべきは後段の「近日このことは出版される」の一節です。近畿調査の一ヵ月後に記された書簡で、すでに調査成果の出版を北畠に口頭で伝えているのです。この調査成果が収録された鳥居龍蔵の著書『有史以前の日本』が出版されるのは、1918（大正7）年7月のことです。鳥居と本山の二人の間では、鳥居の著書の出版は、近畿調査の直後から予定されていたのかもしれませんが。

（松永友和）

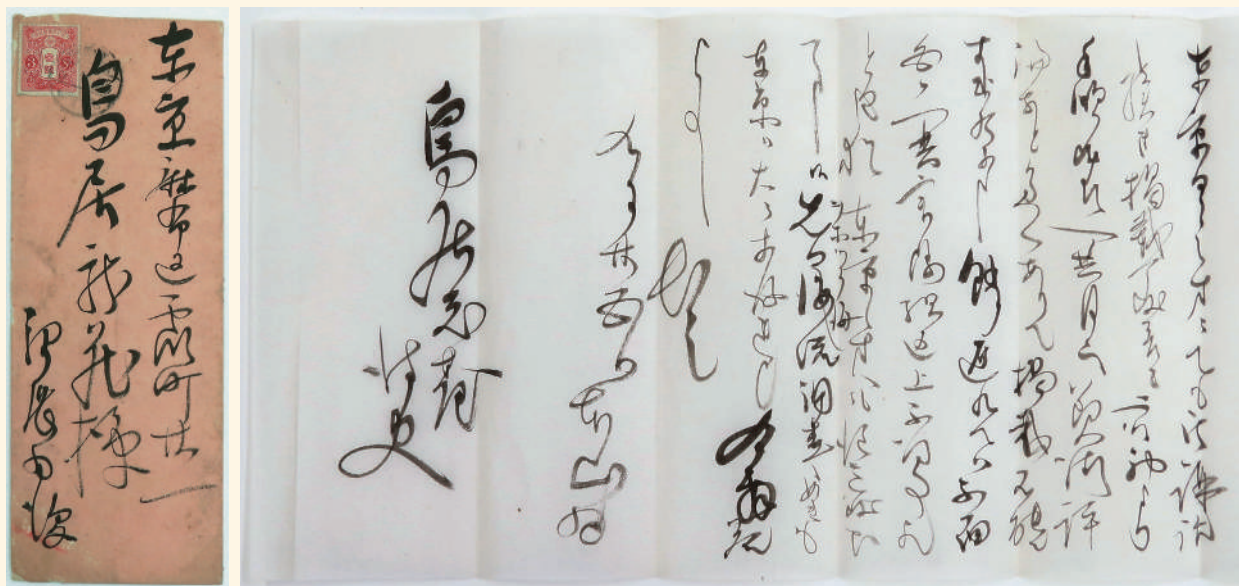


図1 大正6年9月25日付の鳥居龍蔵宛本山彦一書簡（部分、徳島県立鳥居龍蔵記念博物館蔵）

鳥居龍蔵に学ぶ「地域学」

このコーナーでは、鳥居龍蔵の足跡のなかから、地域に溶け込み、気軽に訪れることのできる、徳島県内の歴史文化遺産を紹介します。

「段の塚穴古墳群」は、徳島県美馬市美馬町坊僧・東宗重にある古墳で、1942（昭和17）年に「段の塚穴」として徳島県ではじめて国の史跡に指定されました。国への指定から半世紀以上前の1886（明治19）年7月1日、当時16歳の青年・鳥居龍蔵は、同古墳群を調査し、翌年7月発行の『東京人類学会報告』第2巻第17号に「阿波国二古墳ノ記」として、「阿波国勢見山古墳」とともに、同古墳群を紹介しました。これは、鳥居にとって事実上、最初の論文でした。

この古墳群は、円墳2基（太鼓塚古墳・棚塚古墳）から構成されています。埋蔵施設は横穴式石室で、曲線的な平面プランと、ドーム状の天井に特徴があり、「段の塚穴型」と呼ばれます。同様の形態の石室が、美馬市域周辺の古墳で多く確認されることから、吉野川流域とは異なる勢力の存在が思い起こされます。特に、鳥居が調査した太鼓塚古墳は、その大きさに特色があります。石室は、全長13.1m、高さ4.25mもあり、徳島県内では唯一、腰をかがめなくて石室に入ることができる古墳です。その後、1951（昭和26）年には、太鼓塚古墳の石室入り口付近から、須恵器、土師器等が出土しており、美馬郷土博物館に保管され、見応えのある資料群として知られています。

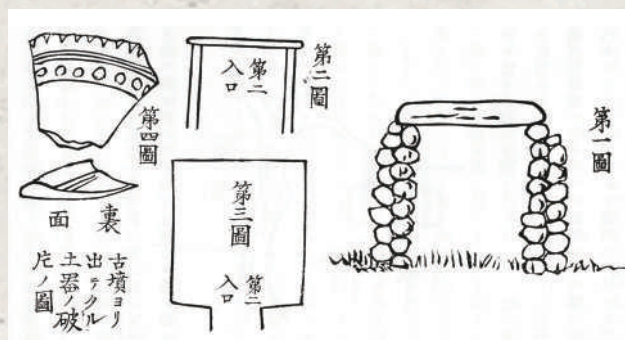
現在、「段の塚穴古墳群」の付近には駐車場も整備され、誰でも中をのぞくことができるようになっています。先日、筆者も徳島市内から車で約1時間をかけ、同古墳群を実見しました。蒸し暑い初夏の気候のなか、古墳の内部に入るとヒンヤリとした空気が気持ちよく、小さな洞窟に入ったような印象がありました。

鳥居青年が調査を行った明治19年、四国には未だ鉄道が開通していませんでした（四国最初の鉄道は、明治21年の伊予鉄道・松山～三津間、徳島県最初の鉄道は、明治32年の徳島鉄道・徳島～鴨嶋間）。16歳の青年は、近代的な交通手段が整わないなか、苦勞して古墳をたずね、これを図化して学界に問いました。その行動力が、後の学問的な飛躍につながったのでしょう。

（小林篤正）



古墳の現況

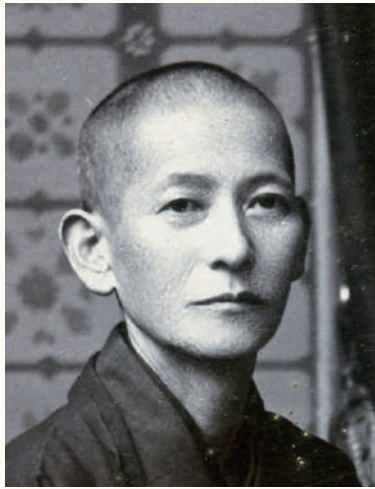


鳥居のスケッチ図



古墳の全景

龍蔵を巡る人々 — 碩学と社会のインターフェイス —



一胤の肖像

須木一胤（1873～1936）は、明治から昭和にかけて活躍した徳島の日本画家です。本名を治郎吉と言い、画師の佐香美古（1812～1870）に住吉派の画法を学び、今の県立脇町高等学校で教鞭をとりました。そして1902（明治35）年から1928（昭和3）年までの26年間、徳島県師範学校で図画科の教諭を務めました。

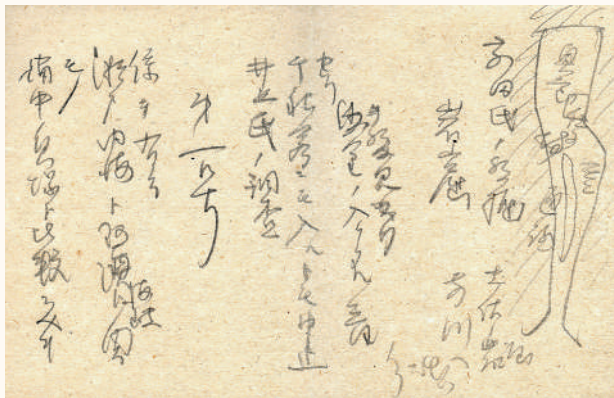
一胤は鳥居龍蔵と面識がありませんでしたが、ある作品の制作をめぐる彼をつよく意識しました。1918（大正7）年、旧藩主家の蜂須賀家で世代交代がありました。旧藩士族の人たちは、それを祝って徳島城の復元図を贈ることを決め、一胤に図の制作を依頼しました。徳島城は、1875（明治8）年に建物の大半が取り壊され、当時は石垣や水をたたえた堀などが残されていました。一胤は、建物の平面図や古写真を検討し、城跡を歩いて地形をスケッチし、故老に訊くなどして復元を試みましたが、うまく行かないまま年月が経ちました。

1922（大正11）年、鳥居が徳島城跡で城山貝塚を発見し、発掘調査を行ったことは地元で大きな話題となりました。識者や一般の県民が続々と貝塚の見学に訪れましたが、彼らの中には一胤も交じっていたと思われます。なぜなら一胤は、この年の8月に鳥居が城山貝塚について話した講演会に参加し、驚くほど熱心に記録を採っているからです。

そして11月、鳥居は、仕上げられた徳島城復元図について一覽を乞われ、意見を求められました。復元図には、権威ある学者のお墨付きが必要とされたようです。このときの鳥居の言葉は残されていませんが、図は翌年になって旧藩主家に納められました。

徳島城復元図が完成したのは1922（大正11）年であり、奇しくも城山貝塚が発掘された年にあたります。復元という困難な作業に区切りがついたのは、おなじ場所をめぐる、鳥居の華々しい活動が影響したのかもしれませんが。

（大橋俊雄）



鳥居の講演内容を記録した一胤の手帳



徳島城復元図の下絵、完成品は現在所在不明

鳥居龍蔵と安藤正楽

石尾 和仁

愛媛県宇摩郡小富士村（現在の四国中央市土居町）出身の安藤正楽は、明治法律学校を卒業後、愛媛県会議員として被差別部落の分校問題や軍事関連予算の濫用を取り上げるなど、市民の目線で取り組んだ政治家です。明治40年には日露戦争から帰還した同郷の兵士に依頼されて「日露戦役記念碑」の碑文を起草しました。しかし、その一節に「忠君愛国の四字を滅す」とあったことから、大逆事件の頃に碑文の文面が削られてしまいました。

安藤が県会議員を辞した後に東京帝国大学人類学教室で学ぶことになったことから鳥居龍蔵とも親交が生じ、安藤のもとに鳥居からの書簡が数多く届くことになりました。その書簡群は、現在、四国中央市の暁雨館に保管されていますが、そのことを鳥居の遠縁

で「鳥居龍蔵を語る会」の会員である鳥居喬さんからご教示いただいた筆者は、長谷川賢二現館長とともに調査・撮影に赴きました。なお、安藤は帰郷後に愛媛県では初の本格的な発掘調査となる宇摩郡平坂山での調査を実施するなど、愛媛考古学界の草分け的存在でもあります。

さて、安藤宛の鳥居書簡には第5回台湾調査やその後の朝鮮半島調査の際の先々から投函されたものが多くあり、調査の行程や内容を推し量るのに大いに役立ちます。開館1周年記念展「鳥居龍蔵の見た台湾」でも展示品の1つとして安藤宛の書簡の一部を紹介しました。また、拙稿



「鳥居龍蔵が見た台湾」展の展示解説

「鳥居龍蔵の第5回台湾調査をめぐって」（『徳島県立鳥居龍蔵記念博物館研究報告』1号）や「鳥居龍蔵の朝鮮半島調査実施時期をめぐって」（『考古学研究』57巻3号）、「鳥居龍蔵の南九州調査」（『鳥居龍蔵記念博物館研究報告』4号）などの論証過程でも利用しています。そうしたことから、私の鳥居龍蔵研究の大きな支えとなっている書簡群なのです。

この他、人類学教室の坪井正五郎や石田収蔵、華族で土俗会に参画していた阿部正功ら、数多の人々に絵葉書や書簡を書き送っています。それらが各地の資料館などで保管されており、これらを集集・分析することで、鳥居研究の新たな側面を切り開くことができるのではないかと思います。豊かな館蔵資料に加えて、各地に散在する関連資料にも注意を向けていくことが求められるでしょう。

（元鳥居龍蔵記念博物館専門学芸員）



日露戦役記念碑

鳥居龍蔵記念博物館 NEWS LETTER No.2

発行年月日 2022年9月20日

編集・発行 徳島県立鳥居龍蔵記念博物館

〒770-8070 徳島市八万町向寺山（文化の森総合公園内）

TEL 088-668-2544 FAX 088-668-7197

<http://www.torii-museum.bunmori.tokushima.jp>